



報道提供資料

令和5年7月12日（水）午後4時

問合せ：大阪市鶴見区緑地公園 2-136
（公財）国際花と緑の博覧会記念協会
企画事業部長 三谷彰一
企画事業部企画事業課係長 大栗大
<https://www.expo-cosmos.or.jp>
090-6913-1445（7月12日のみ）
06-6915-4513

2023年（第30回）コスモス国際賞の受賞者は クリスティン・シュレイダー＝フレッシュット博士

誰もが公正に扱われ、健全な環境で暮らせる社会の実現を目指す際に不可欠な概念「環境正義」を構築し、とりわけ、将来世代の環境問題が現世代にとっても重要であるという「世代間公平」をいち早く提唱した。

公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会（会長：御手洗富士夫）は、7月12日開催の理事会で、コスモス国際賞委員会（委員長：山極壽一）、同選考専門委員会（委員長：白山義久）からの報告を受け、ノートルダム大学名誉教授のクリスティン・シュレイダー＝フレッシュット博士（78歳）を2023年（第30回）コスモス国際賞の受賞者に決定した。

クリスティン・シュレイダー＝フレッシュット博士は、多様な環境と人間との関係を考究した研究者で、「環境正義」と「世代間公平」の重要性を提唱し、社会全般に様々な影響を与えた。中でも博士自身が開発した、定量的リスク評価手法に基づく「環境正義」は、誰もが公正に扱われ、健全な環境で暮らせる社会の実現を目指す際に不可欠な概念として、現代では、政策立案や政治マニフェストの提唱において環境問題を論ずる際に考慮すべき必須事項となっている。

なお、授賞式は、本年11月8日に大阪で開催する予定。



写真画像ファイルは次のURLにあります。

<https://www.expo-cosmos.or.jp/main/cosmos/2023photo.html>

1. 授賞の対象

花と緑に象徴される地球上のすべての生命体の相互関係およびこれらの生命体と地球との相互依存、相互作用に関し、地球的視点からその変化と多様性の中にある関係性、統合性の本質を解明しようとする研究活動や業績であって、「自然と人間との共生」という理念の形成発展に特に寄与すると認められるもの。

上記の観点から、以下の点を重視する。

- (1) 分析的、還元的な方法ではなく、包括的、統合的な方法による業績であること。
- (2) 地球的視点にたった業績であること。特定の地域や個別的現象に関するものであっても、普遍性があること。
- (3) 直接的な問題解決型ではなく、長期的な視野をもつ業績であること。

2. 選考の経緯

2023年4月から6月までコスモス国際賞選考専門委員会を3回開催し、155件を対象に審査した上、6月16日開催のコスモス国際賞委員会で受賞者を決定した。

<2023年コスモス国際賞の選考対象>

2020年45件、2021年34件、2022年37件、2023年39件 合計155件 (26カ国)

<国別内訳>

日本(40)、アメリカ(39)、イギリス(16)、ドイツ(11)、タイ(8)、ブラジル(6)、オーストラリア(5)、カナダ(4)、ベルギー(4)、スロバキア(3)、フィリピン(3)、インド(2)、インドネシア(2)、オランダ(2)、フランス(2)、シンガポール(1)、中国(1)、ケニア(1)、イスラエル(1)、アルゼンチン(1)、スペイン(1)、韓国(1)、スイス(1)、台湾(1)、オーストリア(1)、デンマーク(1)

※二重国籍はそれぞれカウント

3. その他

(1) 授賞式

令和5年11月8日(水)、住友生命いずみホール(大阪市中央区)で行う。

(2) その他

受賞者には賞状、賞牌および副賞(4,000万円)を贈呈する。

添付資料

- ・受賞者の概要
- ・授賞理由
- ・その他(歴代受賞者、コスモス国際賞委員会委員・選考専門委員会委員名簿)

受賞者の概要

氏名 クリスティン・シュレイダー＝フレシェット
Kristin Shrader-Frechette

生年月日 1944年9月14日（78歳） アメリカ・ケンタッキー州生まれ

国籍 アメリカ

役職 ノートルダム大学 オニール家講座 名誉教授（哲学、生物科学）

学歴

1966年 ザビエル大学 学士（物理学）

1967年 ザビエル大学 エッジクリフカレッジ 学士 大学最優等位（数学）

1972年 ノートルダム大学 博士（科学哲学）

1982年 カリフォルニア大学 サンタバーバラ校 博士研究員（経済学）

1983年 カリフォルニア大学 サンタバーバラ校 博士研究員（水文地質学）

1986年 フロリダ大学 博士研究員（生物科学）

職歴

1971-1973年 エッジクリフカレッジ 助教授（哲学）

1973-1982年 ルイビル大学 教授（哲学、自然科学）

1982-1984年 カリフォルニア大学サンタバーバラ校 教授（科学哲学、環境学）

1984-1987年 フロリダ大学 教授（哲学、自然科学）

1987-1998年 南フロリダ大学 特別名誉教授（哲学、環境科学）

1998-2019年 ノートルダム大学 オニール家講座 教授（哲学、生物科学）

2019-現在 ノートルダム大学 オニール家講座 名誉教授（哲学、生物科学）

主な著書

1. *Tainted: How Philosophy of Science Can Expose Bad Science*
New York: Oxford University Press, 2014
2. *What Will Work: Fighting Climate Change with Renewable Energy, Not Nuclear Power*
New York: Oxford University Press, 2011
3. *Taking Action, Saving Lives: Our Duties to Protect Environmental and Public Health*
New York: Oxford University Press, 2007

4. *Environmental Justice: Creating Equality, Reclaiming Democracy*
New York: Oxford University Press, 2002
邦訳：「環境正義：平等とデモクラシーの倫理学」勁草書房, 2022
5. *Technology and Human Values*, coedited with Laura Westra
Savage, MD: Rowman and Littlefield, 1997
6. *The Ethics of Scientific Research*
Savage, MD: Rowman and Littlefield, 1994
7. *Method in Ecology: Strategies for Conservation Problems*, coauthored with biologist Earl D. McCoy
Cambridge: Cambridge University Press, 1993
8. *Burying Uncertainty: Risk and the Case Against Geological Disposal of Nuclear Waste*
Berkeley: University of California Press, 1993
9. *Policy for Land: Law and Ethics*, coauthored with political scientist Lynton K. Caldwell
Savage, MD: Rowman and Littlefield, 1993
10. *Expert Judgment in Assessing Radwaste Risks*
Carson City, Nevada: Nuclear Waste Project Office / US Department of Energy, 1992
11. *Risk and Rationality*
Berkeley: University of California Press, 1991
邦訳：「環境リスクと合理的意思決定—市民参加の哲学」昭和堂, 2007
12. *Nuclear Energy and Ethics*, edited volume
Geneva: World Council of Churches, 1991
13. *Risk Analysis and Scientific Method Methodological Ethical Problems with Evaluating Societal Hazards*
Boston: Kluwer, 1985
14. *Science Policy, Ethics, and Economic Methodology: Some Problems with Technology Assessment and Environmental Impact Analysis*
Boston: Kluwer, 1984
15. *Four Methodological Assumptions in Risk-Cost-Benefit Analysis*
Springfield, Virginia: National Technical Information Service, 1983
16. *Environmental Ethics*
Pacific Grove, California: Boxwood Press, 1981; second edition, 1991
邦訳：「環境の倫理」晃洋書房, 1993
17. *Nuclear Power and Public Policy: Social and Ethical Problems with Fission Technology*
Boston: Kluwer, 1980; second edition, 1983

授賞理由

クリスティン・シュレイダー＝フレシェット博士は、多様な環境と人間との関係を考究した研究者である。博士は環境問題を考察する際に「環境正義」と「世代間公平」の概念が重要であることを提唱し、いずれも社会全般に様々な影響を与えた。中でも博士が積極的に関与してきた、科学的知見を踏まえた合理的かつ定量的なリスク評価手法に基づく「環境正義」は、誰もが公正に扱われ、健全な環境で暮らせる社会の実現を目指す際に不可欠な概念として、現代では、政策立案や政治マニフェストの提唱において環境問題を論ずる際に考慮すべき必須事項となっている。

地球規模の気候変動などに代表される環境問題の大きな課題のひとつは、人為的影響が現在ではなく未来になって表れることである。従来の人間社会では、このような将来世代における諸問題を、現世代においては影響が判然としないという暗黙の名目のもと、解決はもとより、十分な議論もせずに先送りしてきた。これに対し博士は、編者を務めた『**Environmental Ethics** (邦題『環境の倫理』)』の論考「テクノロジー、環境、世代間の公平」において、将来世代の環境問題が現世代にとっても同様に重要であることを理論的に説明した。そのなかで、博士は、日本語の「恩」や「恩返し」の論理を導入し、先祖(過去)から受けた自然環境保持という「恩」を子孫(未来)に手渡すことによって、持続可能性が実現されるという思想を強調した。

1970年代、80年代には、環境保護よりも経済活動や産業活動を優先する論調が根強かったが、博士は著書、『**Environmental Justice** (邦題『環境正義』)』のなかで、社会的正義の問題として環境問題をとらえる「環境正義」の概念を、定量的リスク評価を基盤として理論的に構築し、環境問題が自然保護運動に過度に傾斜していたことに対し、科学的な知見にもとづいた社会理論や思想的枠組みが重要であることの学術的基盤を確立した。

博士が提唱した世代間の公平や環境正義の概念は、とりわけ西洋において、哲学全体の視野を拡張させることに大きく貢献した。さらに、環境問題について包括的に扱っている前掲の編著書はいずれも日本語を含む多数の言語に翻訳されており、それ以後の博士の学術的な著作群とともにこれらの業績は、現代では汎世界的に広く受け入れられ、定着している。

博士は、講壇哲学の中に留まるのではなく、実社会から平等・公平・正義といった諸問題をすくいあげて理論的にきたえるという、理論と現実問題の知的往還を生産的に実現してきた。思想的基盤が強固だからこそ、博士の環境正義の活動は広く様々な層から支持を得、学術的な活動だけではなく、政策決定に関与する各種委員会にも参画し、社会から厚い信頼を得ている。理念と現実とを架橋し実践、体現する博士の姿勢は、実学を偏重し、哲学などの基礎的な人文学を「役に立たない」として軽視しがちな昨今の風潮に、大きな警鐘を鳴らすものでもある。

今回、コスモス国際賞は30回目の授賞を迎える。賞の根本思想である「共生」が意味する「生命の関わり」に「環境正義」という科学的かつ哲学的なアプローチを行った博士の取組は、これまで本賞が顕彰してきた「生物多様性」「普遍性」「相互依存」「生態系サービス」等の多様な要素を包含しており、30回目の節目に相応しい受賞者であると評価した。

受賞者コメント

2023年のコスモス国際賞を授与してくださったコスモス国際賞委員会の皆様に感謝いたします。私は、定量的なリスク評価手法を用いて、子供たちや将来の世代、少数民族、貧しい人々に不当に課せられている環境汚染の負担増という環境不正義を明らかにし、その是正に貢献することで、自然と人間との共生という花博記念協会と同じ目的を追求し続けたいと考えています。しかし、この授賞で最も重要なのは、私以外の人たちが可能にしたことであり、私自身がしたことが主なものではないということです。

私は数学の学士号を取得し、数学の博士号を取得するつもりでいました。しかし、ある哲学の教授が、私の知らないうちに、名誉あるウッドロウ・ウィルソン博士課程フェローシップに私を推薦してくれたのです。こうして私は科学哲学、科学的方法の分析で博士号を取得しました。私の博士論文は、確率論、統計学の一分野である情報理論におけるモデリングを評価したものです。

アメリカ国立科学財団は、私に三つの連続した競争的な博士研究員のポジションを与えてくれました。最初のポジションは経済学で、環境影響をより適切に評価するための定量的リスク評価とリスク費用便益評価の方法を学びました。2番目のポジションは水文地質学で、放射性廃棄物や有毒廃棄物の地下輸送モデルを理解するのに役立ちました。3番目のポジションは生物科学の分野で、3年間、有害汚染が人体に及ぼす影響、つまりは、疫学的影響、生態学的影響を調査しました。

1980年、私は「ecological justice」（現在は「environmental justice、環境正義」）に関する最初の本と論文を書きました（と思われる）。私は、原子力エネルギーと放射性廃棄物のために、子どもたちや将来の世代、そして原子炉周辺住民が負う、より重い汚染と健康への負担を明らかにしました。

1985年までに、私は世界中で「ecological injustice」（現在は「environmental injustice、環境不正義」）を明らかにし、定量的リスク評価（QRA）がそのための最も適した科学的手法であると主張する支援活動をしていました。1989年まで、私はスーツケース一つで何度も旅をしました。まずスウェーデンに行き、放射性廃棄物の永久地層貯留計画を評価し、次にイタリアに行き、定量的リスク評価が環境不正義を暴くために最適であることを訴え、最後にコンゴに行き、アフリカ人が先進国から有害廃棄物を受け入れていることによる健康被害を明らかにし、これらの輸入を止めるよう強く要請しました。その結果、1991年に採択されたバマコ条約で最終的に目的が達成されました。

私は経歴の大半の期間、哲学、生物科学、環境科学の職を兼任していました。主に数学的、生物学的、経済学的、水文地質学的手法と環境リスクの定量的リスク評価に関する17冊の本を執筆しました。私の著作は13カ国語に翻訳され、出版されています。

しかし、最も重要なのは、これらの業績ではなく、私が行わなかったことです。子どもたちに優れた教育を受けさせるために払ってくれた両親の犠牲は私にはないものです。社会の声なき声の代弁者となる方法を示した勇気ある母の行いは私にはないものです。黒人であり私の母の育ての親であるキャサリン・ジャックマンは、周囲のほとんどすべての白人から日常的に不当な扱いを受けていたにもかかわらず、やさしさと愛情をもって白人である私の母を最愛の子として育ててくれました。私の病弱な実の祖母と生活に苦労していた祖父にはそれができなかったからです。数学者や物理学への私の愛を育てくれた、すばらしい中学校の先生たちの行い、また、フランス人やドイツ人の祖先が子孫により良い生活を与えるために故郷を離れた行いは、私にはない価値ある行いです。

日本人が「恩」と呼ぶ計り知れない贈り物を与えてくれる、このような生命を与えてくれる何百人もの人々がいなければ、私は今日ここにいなかったでしょう。私はこの賞をこれらの方々、とりわけキャサリン・ジャックマンと私の母に捧げ、この「恩」を後世に伝えていくことを誓います。

コスモス国際賞歴代受賞者（肩書きは受賞時）

「コスモス国際賞」は、「自然と人間との共生」という理念の発展に貢献し、「地球生命学」とも呼ぶべき、地球的視点における生命相互の関係性、統合性の本質を解明しようとする研究活動や学術活動を顕彰するために設けられた国際賞です。

1993年（第1回）受賞者

ギリアン・フランス卿

イギリス 王立キュー植物園園長

南米アマゾン地域を中心とする熱帯植物研究の権威。地球全域の植生を統一データ化する「地球植物誌計画」を提唱、世界の植物学者とネットワークを組んで実現に努力した。

1994年（第2回）受賞者

ジャック・フランソワ・バロー博士（物故者）

フランス パリ国立自然史博物館教授

太平洋の島々の自然と人々の暮らしについて民族生物学的な調査、研究を行い、これをもとに人間と食糧をテーマに、全地球的な視点からユニークな考察を発表した。

1995年（第3回）受賞者

吉良龍夫博士（物故者）

日本 大阪市立大学名誉教授

光合成による植物の有機物生産の定量的研究をもとに、生態学の新分野となる生産生態学を確立。東南アジア地域の熱帯林生態系の研究で指導的な役割を努めた。

1996年（第4回）受賞者

ジョージ・ピールズ・シャラー博士

アメリカ 野生生物保護協会科学部長

40年にわたり、世界各地で様々な野生生物の生態と行動を研究。『マウンテンゴリラ・生態と行動』『ラストパンダ』など数多くの著書で全世界に野生動物の実態を知らせた。

1997年（第5回）受賞者

リチャード・ドーキンス博士

イギリス オックスフォード大学教授

1976年に出版された著書『利己的な遺伝子』で、生物学の常識を覆す大胆な仮説を発表。その後も、生物の進化について新しい見解を提示して、学会に論争を起こしている。

1998年（第6回）受賞者

ジャレド・メイスン・ダイヤモンド博士

アメリカ カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授

医学部教授として生理学を研究する一方、40年にわたりニューギニアの熱帯調査を行い、これらを基に人類の歴史的な発展を再構成したユニークな考察を発表した。

1999年（第7回）受賞者

呉征鎰（ウー・チェン・イー）博士（物故者）

中国 中国科学院昆明植物研究所教授・名誉所長

中国を代表する植物学者。中国を拠点に東アジア地域の植物の調査研究に取り組み、中国全土の植物の種の多様性を網羅する『中国植物誌』の編集を主導、刊行を実現させた。

2000年（第8回）受賞者

デービッド・アッテンボロー卿

イギリス 映像プロデューサー、自然誌学者

野生生物のドキュメント映像のパイオニア。BBC時代から退社後を含め、約半世紀にわたって、地球上の野生の動植物の生の姿を、優れた映像で全世界に伝えた。

2001年（第9回）受賞者

アン・ウィストン・スパーン教授

アメリカ マサチューセッツ工科大学教授

都市と自然は対立するものでなく、周辺の地域環境と調和し、その一部として存在する都市の構築が可能であるとし、都市が自然との調和をはかりながら発展する方策を示した。

2002年（第10回）受賞者

チャールズ・ダーウィン研究所

エクアドル・ガラパゴス諸島

1964年設立の国際的 NGO・NPO 組織。南米エクアドル領のガラパゴス諸島で、ゾウガメ、イグアナなど、特異な固有生物の調査研究と保護に当たっている。

2003年（第11回）受賞者

ピーター・ハミルトン・レーブン博士

アメリカ ミズーリ植物園園長

米国を代表する植物学者で、地球の生物多様性の保全を提唱した国際的な先駆者。常に地球的な視点で生命の問題を考え、学術と実践両面で自然と人間との共生に貢献した。

2004年（第12回）受賞者

フーリャ・カラビアス・リジョ教授

メキシコ メキシコ国立自治大学教授

途上国の立場から全地球的な環境問題を考え、フィールドワークとさまざまな学問分野の研究を統合したプログラムを実施し、異なる条件下での困難な課題に優れた成果を挙げた。

2005年（第13回）受賞者

ダニエル・ポーリー博士

カナダ ブリティッシュ・コロンビア大学水産資源研究所所長・教授

漁業と海洋生態系の関連を包括的に研究。海洋生態系保全と水産資源の持続的利用を可能にする科学的モデル開発など、海洋生態系と資源研究の分野で優れた業績を収めた。

2006年（第14回）受賞者

ラマン・スクマール博士

インド インド科学研究所 生態学センター・教授

ゾウと人間との生態関係や軋轢への対処をテーマとした研究から、生物多様性保護と自然環境の保全全般にわたる多くの提言を行い、かつ実行し、野生生物と人間との共存という分野での先駆的な取り組みを行なった。

2007年（第15回）受賞者

ジョージナ・メアリー・メイス博士（物故者）

イギリス ロンドン大学自然環境調査会議体群生物学研究センター所長兼教授

絶滅危惧種を特定・分類し、科学的な基準を作成することにおいて指導的役割を果たし、種の保全、生物多様性保全に大きく貢献する取り組みを行なった。

2008年（第16回）受賞者

ファン・グエン・ホン博士

ベトナム ハノイ教育大学名誉教授

戦争や乱開発がマングローブの生態系に壊滅的な打撃を与えたベトナムで、マングローブの科学的、包括的な調査・研究を行い、マングローブ林の再生に大きな成果をあげた。

2009年（第17回）受賞者

グレッチェン・カーラ・デイリー博士

アメリカ スタンフォード大学教授

人類社会が依存する生物多様性のもつ「生態系サービス」の価値を包括的に捉えて、「国連ミレニアム生態系評価」など国際的な取り組みに貢献するとともに、生態学・経済学を統合し、自然資本の持続的な利用のために「自然資本プロジェクト」を実施する等大きな役割を果たした。

2010年（第18回）受賞者

エステラ・ベルグレ・レオポルド博士

アメリカ ワシントン大学名誉教授

父アルド・レオポルド氏（1887-1948）が提唱した「土地倫理」を継承・追及するとともに、アメリカ各地においてこの考えを広げるなど、多大な功績を残した。

2011年（第19回）受賞者

海洋生物センサス科学推進委員会

事務局：アメリカ ワシントン DC

海洋生物の多様性、分布、生息数についての過去から現在にわたる変化を調査・解析し、そのデータを海洋生物地理学情報システムという統合的データベースに集積することにより、海洋生物の将来を予測するプロジェクト「海洋生物センサス」を主導した。

2012年（第20回）受賞者

エドワード・オズボーン・ウィルソン博士（物故者）

アメリカ ハーバード大学名誉教授

アリの自然史および行動生物学の研究分野で卓越した研究業績をあげ、その科学的知見を活かして人間の起源、人間の本性、人間の相互作用の研究に努めたほか、生物多様性保全や環境教育を推進する実践家として活動した。

2013年（第21回）受賞者

ロバート・トリート・ペイン博士（物故者）

アメリカ ワシントン大学名誉教授

生物群集の安定的な維持に捕食者の存在が不可欠なことを、明快な野外実験によって示し、キーストーン種という概念を提唱した。一連の研究は、生物多様性を扱う群集生態学の分野に新しい視点をもたらし、生態学はもとより保全生物学や、一般の人々の生物多様性への理解に大きな影響を与えた。

2014年（第22回）受賞者

フィリップ・デスコラ博士

フランス コレージュ・ド・フランス教授

人類学者として、南米アマゾンに住む先住民アシュアールの人々の自然観とそこの自然と関わる諸活動に焦点を当て、これらの綿密な調査から哲学的な思想へと論を進め、自然と文化を統合的に捉える「自然の人類学」を提唱した。

2015年（第23回）受賞者

ヨハン・ロックストローム博士

スウェーデン スtockホルム・レジリエンス・センター所長

人類が地球システムに与えている圧力が飽和状態に達した時に不可逆的で大きな変化が起こりうるとし、プラネタリーバウンダリーを把握することで、壊滅的な変化を回避でき、その限界がどこにあるかを知ることが重要であるという考え方を示した。

2016年（第24回）受賞者

岩槻 邦男博士

日本 東京大学名誉教授

生物多様性を探求し、伝統的な手法に加えて、分子系統的な手法も取り入れつつ、包括的かつ多面的に植物系統分類学を発展させた。また、系統分類学を含めた多様性生物学による生物の統合的理解の重要性を説き、そのような理解が生物の豊かさや自然との共生を支える重要な原理であることを明らかにした。

2017年（第25回）受賞者

ジェーン・グドール博士

イギリス ジェーン・グドール・インスティテュート創設者

1960年から、野生チンパンジーの研究を続け、その全体像を明らかにするとともに、チンパンジーが住む森を保全するための植林活動や環境教育活動を行った。博士が創案した青少年が担い手となる環境教育プログラム「ルーツアンドシューツ」は99カ国で約15万団体が、その活動を展開している。

2018年（第26回）受賞者

オギュスタン・ベルク博士

フランス フランス国立社会科学高等研究院教授

和辻哲郎の著作「風土」から大きな影響を受け、風土概念をさらに拡充、深化、発展させ、「風土学 (mésologie)」と名づけられる新たな学問領域を切り拓き、自然にも主体性があるという「自然の主体性論」を提唱した。

2019年（第27回）受賞者

スチュアート・L・ピム教授

アメリカ デューク大学教授（保全生態学）

地球上の生物の食物網の複雑さや種の絶滅速度等についての理論を提唱し、地球規模の生物多様性に関する政策などに大きな影響を与えると共に、生物保全活動を実践する団体を支援するNGOを設立するなど、生態系や生物多様性の保全に対して、科学と実践の両面において多大な功績を収めた。

2021年（第28回）受賞者

ピーター・ベルウッド博士

オーストラリア オーストラリア国立大学名誉教授

考古学、言語学、人類生物学の学際的研究による「初期農耕拡散仮説」を提唱し、農耕の起源と初期農耕民の移動・拡散過程を明らかにするとともに、この研究を通して、自然と人間との共生の歴史を統合的な視点から探求した。

2022年（第29回）受賞者

フェリシア・キーシング博士

アメリカ バード大学教授

自然生態系の生物多様性と、人獣共通感染症病原体が人間社会へ伝播するリスクとの関係性を、実践的な調査研究によって明らかにし、ポストコロナ時代における自然と人間の共生のあり方に科学的な示唆を与えた

2023年コスモス国際賞 賞委員会委員および顧問
International Cosmos Prize Committee

2023.4 (五十音順)

役職 Position	氏名 Name	専門分野 Specialty	職名 Official Title
委員長 Chairperson	山極 壽一 Dr. YAMAGIWA Juichi	人類学、霊長類学 Anthropology, Primateology	総合地球環境学研究所所長 Director General, Research Institute for Humanity and Nature
副委員長 Vice Chairperson	中西 友子 Dr. NAKANISHI Tomoko	放射線植物生理学 Radioplant physiology	東京大学名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
委員 Member	秋道 智彌 Dr. AKIMICHI Tomoya	生態人類学 Ecological anthropology, Ethno-biology	山梨県立富士山世界遺産センター所長 Director General, Fujisan World Heritage Center
委員 Member	浅島 誠 Dr. ASASHIMA Makoto	発生生物学 Developmental biology	帝京大学特任教授 Research Professor, Teikyo University
委員 Member	池内 了 Dr. IKEUCHI Satoru	天文学 Astronomy	総合研究大学院大学名誉教授 Professor Emeritus, The Graduate University for Advanced Studies
委員 Member (選考委員長兼務)	白山 義久 Dr. SHIRAYAMA Yoshihisa	海洋生物学 Marine biology	京都大学名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
委員 Member	西澤 直子 Dr. NISHIZAWA Naoko	植物分子生物学 Plant molecular biology	石川県立大学学長 President, Ishikawa Prefectural University
委員 Member	林 良博 Dr. HAYASHI Yoshihiro	動物資源科学 Animal science and resource	東京大学名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
委員 Member	横張 真 Dr. YOKOHARI Makoto	緑地環境科学 Landscape and environmental science	東京大学大学院 工学系研究科教授 Professor, School of Engineering, The University of Tokyo
委員 Member	鷺谷 いづみ Dr. WASHITANI Izumi	生態学・保全生態学 Ecology, Conservation ecology	東京大学名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
委員 Member	和田 英太郎 Dr. WADA Eitaro	生物地球科学 Biogeochemistry	京都大学名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University

役職 Position	氏名 Name	専門分野 Specialty	職名 Official Title
顧問 Advisor	岩槻 邦男 Dr. IWATSUKI Kunio	植物分類学 Systematic botany	東京大学名誉教授 Professor Emeritus, The University of Tokyo
顧問 Advisor	尾池 和夫 Dr. OIKE Kazuo	地球科学 Geoscience	静岡県立大学理事長兼学長 Chairman and President, University of Shizuoka
顧問 Advisor	岸本 忠三 Dr. KISHIMOTO Tadamitsu	免疫学 Immunology	大阪大学免疫学フロンティア 研究センター特任教授 Project Professor, Immunology Frontier Research Center, Osaka University
顧問 Advisor	中村 桂子 Dr. NAKAMURA Keiko	生命科学・生命誌 Biohistory	JT 生命誌研究館名誉館長 Honorary Director, Biohistory Research Hall

2023年コスモス国際賞 選考専門委員会委員
International Cosmos Prize Screening Committee of Experts

2023.4 (五十音順)

役 職 Position	氏 名 Name	専門分野 Specialty	職 名 Official Title
委員長 Chairperson	白山 義久 Dr. SHIRAYAMA Yoshihisa	海洋生物学 Marine biology	京都大学名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
副委員長 Vice Chairperson	池谷 和信 Dr. IKEYA Kazunobu	環境人類学 Environmental anthropology	国立民族学博物館教授 Professor, National Museum of Ethnology
委員 Member	沖 大幹 Dr. OKI Taikan	地球水循環システム Global Hydrological System	東京大学大学院工学系研究科 教授 Professor, School of Engineering, The University of Tokyo
委員 Member	モンテ・カセム Dr. Monte Cassim	環境科学 Environmental science	国際教養大学理事長兼学長 President, Akita International University
委員 Member	佐倉 統 Dr. SAKURA Osamu	科学技術社会論 Science and technology studies	東京大学大学院情報学環教授 Professor, Interfaculty Initiative in Information Studies, The University of Tokyo
委員 Member	高村 ゆかり Ms. TAKAMURA Yukari	国際法、環境法 International law, Environmental law	東京大学未来ビジョン研究センター教授 Professor, Institute for Future Initiatives
委員 Member	辻 篤子 Ms. TSUJI Atsuko	科学ジャーナリスト Science journalist	中部大学特任教授 Project Professor, Chubu University
委員 Member	深町 加津枝 Dr. FUKAMACHI Katsue	緑地環境科学 Landscape and Environmental science	京都大学地球環境学堂 准教授 Associate Professor, Graduate School of Global Environmental Studies (GSGES), Kyoto University
委員 Member	湯本 貴和 Dr. YUMOTO Takakazu	植物生態学 Plant Ecology	京都大学名誉教授 Professor Emeritus, Kyoto University
委員 Member	横山 潤 Dr. YOKOYAMA Jun	植物分類学 Systematic botany	山形大学理学部教授 Professor, Faculty of Science, Yamagata University